

千葉県A地区 | 地区、 仮設住宅生活者支援活動

LLPまち・コミュニケーション研究会 友田修

城西国際大学福祉総合学部 松下やえ子 森洋子

東日本大震災の被災地の中で、当地区は震源地に近い三陸沿岸とは異なり、幸いにも被害は部分的で、当地の被災者は運悪くたまたま津波の被害に遭った人たちです。つまり、既存コミュニティまるごと被災して仮設住宅暮らしとなった被災者とは異なり、これまで全く繋がりが無い者どうしの仮設住宅暮らしなのです。しかも、被害程度は千差万別であり、行政の対応も他の被災地と比してパワーバランスは低く、コミュニティ形成がされにくい状況にあります。

被災から6週目に当たる4月22日より、そのような状況を予見した地元の城西国際大学福祉総合学部の有志が支援活動に入りました。支援の目的はコミュニティ形成のきっかけづくりですが、特に周囲が復興していく中で、なかなか次の生活の目処が立たず取り残されるだろう（家族を亡くした）単身者、高齢者の支えとなろうという活動です。仮設コミュニティでの人間関係づくりに注力する活動です。そのためにも継続的支援の必要性を感じ、支援活動は仮設住宅の期限である2年間を目処に平均月2回の訪問をすることとなりました。

この活動レポートを通し、災害によらずとも各地で課題となっている地域コミュニティ再生へのヒントを抽出したいと考えます。

11月7日現在で、16回の訪問となります。これまでの活動の節目として、以下に示す段階を経てきました。このたび、その5より連載を開始させていただきます。第1回～第13回の活動は以下のホームページにて掲載をしております。ご参照ください。

(<http://artclowns.jimdo.com/活動アーカイブ/>)

避難所訪問・・・被災者の課題確認及び支援のための関係各所の承認（第1回・第2回）

その1: 仮設住宅訪問スタート・・・信頼関係づくり（第3回・第4回・第5回）

その2: ワークショップ活動開始・・・活動のペースづくり（第6回・第7回・第8回）

その3: メニュー編成（植物の配布等）・・・コミュニティのきっかけづくり（第9回・第10回）

その4: 参加者対象を広げる・・・動機づくり（男性高齢者の参加）（第11回・第12回・第13回）

その5: 被災者自ら動く・・・役割づくり（大学祭での活動）（第15回・第16回・第17回）

第14回 | 地区仮設住宅訪問記録 11月1日(火)

訪問者:松下、森、学生2名 (記録:LLPまち・コミ友田)



被災から7ヶ月余りの時間がたった。海岸沿の更地になった土地は枯れ草に覆われ、元々そこには何も建っていなかったかのような風景である。港に積まれていた瓦礫の山はすでに瓦礫ではなく、粉碎された土のようなものになっていた。ブルドーザーが入ってその山の堆積もずいぶんと小さくなっている。

今回の活動は被災者が活動のエンドユーザーで終わるのではなく、仮設住宅の外の人へ向けてのさらなる活動の準備段階という意味を持たせた。

城西国際大学の大学祭が11月5日に開催され様々な展示がある中、子ども福祉コースの学生が地域の子どもたちを楽しませるコーナーを設けることとなった。そのコーナーの一部に、仮設住宅の高齢者が遊びの指導やプレゼントの配布をするという“外の人へ向けた”企画を持ち込んだ。紙トンボ作りと毛糸のぼんぼん人形配布である。今回はその準備として紙トンボ作りを覚えてもらい、ぼんぼん人形を作ってもらうために活動時間を使った。

松下は、なかなか参加に踏み切れない男性にとっては、参加する理由として活動が社会に開かれた役割として意味を持つことが必要だと考えていた。そんな意図で今回の企画は持ち上がった。子どもたちに「指導をするため」「プレゼントをするため」という目的は、男性にとっての参加意欲に繋がるはずだと。

今回は保育士を目指す二人の女子学生が同行した。集会所に着くと、すでに一人の参加者が待っていた。第1回目訪問の避難所でぼんぼん人形を4つ作ってくれた90歳の男性だ。1時間前から待っていたという。生活支援アドバイザーが常駐するようになり、集会所が開放された空間になったことの効果である。その男性は以前避難所で会ってはいたが、I地区の仮設住宅

に住んでいるのかどうかすら分からなかった人である。筆者らと親しくなったNさんがその男性が仮設住宅にいることを知っていて声を掛けてくれていた。

いつもは声掛けをして廻るのであるが、今回はその必要がなかった。二人、三人と集まってきた。合計9名、そのうち一人は常連の小2の女の子である。

みんなでプレゼントにするぼんぼん人形を作った。カラフルな毛糸が選ばれていく。松下はその明るい色の選択に目を止めた。大きさもたっぷりとしている。避難所で同じ活動をした時は、大きさももっと小さく、色の選択も暗かった。当時一人が二つ、三つ作ったが全てを持ち帰った。今回、松下は参加者がまた人形を持ち帰りたいであろうと気遣い「どうぞ、一つはお持ち帰りください」と言うと、「だって、プレゼントにするんでしょ」と意外に何の未練もなく、置いていく。執着の仕方が全く違う。

松下と森の見解はこうだ。

避難所生活当時は自分の物が一切なかった。支援物資の服も食べ物も「私のためだけのもの」はなかった。手作りしたまさに「自分だけのもの」に飢えていたようであった。そこでのぼんぼん人形は自分を確かめる、自分そのもののような存在であった。

仮設住宅というまがりなりにも自分の空間で半年が過ぎ、身の周りのものが自分の体臭になじみ、自分の生活リズムに落ち着いて自分を取り戻したのだろうか。「取り戻す」というのは適切ではない。新しく築いてきた。3月11日以降に積み上げてきた個々の暮らしと体積した時間の厚みがある人らしい体臭を放つようになった。夫を失った女性の吹っ切れたような笑顔や声の太さを目の当たりにすると、その変わりぶりにこの数ヶ月のただならぬ時の濃さを感じる。これから必要なのは自分が自分の存在を確認するための手鏡ではない。他者が持つ鏡に自分を写してもらおうこと、自分たちコミュニティの状況を写してみることができる大きな姿見だ。

紙トンボは90歳の男性に森が指導した。森の手元を見ながら自分でもやってみている。とても器用な人だ。「おじちゃん、器用なんだよね。枝を削って杖作って、みんなにあげたりしてんだもんね」と周りが言う。子どもたちに教えてあげてほしいと言うとうなづいた。目の奥が「よし」と言ったように見えた。女子学生が男性の紙トンボがよく飛んだのを喜ぶと満足そうな顔をした。この場に若い学生がいること自体が外の社会と繋がっていることになる。世代間交流である。男性は女子学生と人形を作り始めた。

7人の女性はその場で2個ずつ作り上げ、後は宿題にして家で2、3個作ってもらおうようお願いした。宿題用の毛糸を選ぶ姿はどの人もなにかうれしそうなのである。

一息ついてお茶にした。松下が芋のつる、きゅうりを料理してきた。スイートポテト、きゅうりの漬け物も自家製である。どれも家庭の懐かしい味である。二人の若い男性生活アドバイザー

イザーもお茶の席の輪にすっかり和んでいる。余ったスイートポテトをじゃんけんでもらうことになった。これも遊びリテーションの一つなのだ。アドバイザーが本気で遠慮なくじゃんけんに加わった。松下は「アドバイザーさんが勝ったらAちゃんにあげてよ」と言った。じゃんけんではアドバイザーが勝った。ポテトはめでたくAちゃんのものになり、自分の分をAちゃんにあげる人もいて、Aちゃんは家で待つおばあちゃんの分まで持って帰ることになった。このようにAちゃんはたくさんの高齢者に孫のように可愛がられている。被災がなければこのような関係はなかったであろう。この体験はAちゃんにとって財産になるのではないだろうか。

次回は「茶話会と遊び」と伝えた。松下は「一品ずつ持ち寄りましょう」と皆に告げた。どの人もベテランの主婦であろう。今回松下の手料理4種はまさに持ち寄り料理の見本であったのだ。

帰り際に90歳の男性が婦人用の靴を持って来て松下にプレゼントするという。亡くなった妻のものであるらしい。松下はこれをもらった。男性の信頼を受け止めたという表現である。

最後に次回のチラシを全戸に配布する。150戸に入れるのは学生と4人でも時間がかかる。その間に日が暮れた。11月になり戸は閉められている。外に出ている人もいない。けれど気配を感じこちらを覗く人がいる。声を掛けると「ああ、ごくろうさま」と最初の鋭い拒絶の声はもう返ってこない。大学名が入り松下、森の顔写真が入る同じ形式のチラシを毎月入れ続けてきたからであろうか。

日が暮れて寂しい仮設住宅の光景であるが、松下はあることに気づいた。夕飯時の臭いが違うというのだ。そう言われてみると魚を煮付ける懐かしいような匂いが仮設住宅全体を包み込むように漂っている。コンビニ弁当が机の上にポンと置かれていた仮設入居当時にはなかったことだ。水中の生き物が身を守るために粘液をまとうように、その臭いはやさしい分泌物のように感じられた。

手分けして配り終わると、松下が空き瓶に入った風船かずらの種を持っている。植物配布の時にさんざん文句を言いながら苗を持っていった口の悪い男性から「もってけ」と言って手渡されたのだという。

そして駐車場にもどってきた時、我々は素晴らしい光景を見た。女性たち5人が並んで仮設住宅の敷地の外周をウォーキングしているのだ。薄明かりの中、先頭の二人は先程の人形作りのメンバーだ。そして筆者らに全員で手を振った。コミュニティが生まれ育っていると実感した。我々が車に乗り込む時、角を曲がって5人はもう一度手を振ってくれた。森はうれしくなって思い切り手を振り返した。「がんばれー」と松下が大声で叫んだ。

第 15 回 大学祭での活動記録 11 月 5 日(土)

参加者:松下、森、福祉総合学部学生 (記録:LLP まち・コミ友田)



I 地区仮設住宅の 5 人の高齢者が城西国際大学の大学祭に来校した。福祉総合学部子ども福祉コース学生が子どものためにゲームなどを行うために設けた会場が目的地である。そこで彼ら 5 人の高齢者は、子どもたちに紙トンボ作りの指導と人形のプレゼントを行ってもらうために学生から依頼された形での来校である。

期せずして「施される側」になった被災者が、工作の指導と手作り品の配布を行うことで、「施す側」になる。そのことが能動的な態度を取り戻すことに繋がると森と松下が考えたプランだ。

一行は 11 時 30 分に中核地域生活支援センターの職員 2 名と共に大学に到着した。

参加者 5 人はこちらに来るために、こたつの無料配布に並ぶことができなかった。しかし、「大学の手伝いに行く」という理由で公欠扱いになるように交渉し、こたつを確保してきたと聞いた。

90 歳の男性の服装は白いチョッキに黒の皮靴、ズボンに折り目もついている。皆から「おしゃれしましたねえ」と言われると、「そんなことねえよ。全部流されたんだもの、もらいもんだ」と笑った。

案内を買って出たのは仮設住宅を訪問して面識のある介護福祉コース学生と松下ゼミの 6 名である。まずは用意されたお餅で腹ごしらえをする。次に学生たちが行う岩手県宮古市の支援バザーを覗く。そこで 90 歳の男性は気前よく、一万円札で買い物をする。どうも被災者らしくない。子ども福祉コースの会場がオープンするまで屋台（模擬店）を見て歩く。絵の好きな男性高齢者は美術館の見学を希望した。残る 3 人の女性高齢者はお菓子の掴み取りの店が気になる。仮設の友人に土産を買いたいそうだ。その表情はもはや被災者ではない。

1 時に子ども福祉コースの会場に入る。被災の状況を展示したパネルの前に座ってもらった。

パネルは仮設住宅での活動に同行してきた学生が制作した。

「死者13名、不明2名、建物全壊336戸、大規模半壊431戸・・・」

死者13名は、この5人の中の家族も居る。

そして、いよいよ今回のメインイベントが始まった。

90歳の男性は子どもに「見てろよ」と言わんばかりに紙トンボを飛ばして見せている。失敗しても周りの学生や支援員から声援を送られている。「写真撮ってくれ」と本人から注文が出た。人形配布の女性達はおしまいには自ら2、3個ずつ持つと子どもにあげるために立ちあがった。

反省会・・・被災者という「使命感」がもたらしたもの

この日、反省会での話題は「被災者」という言い方に対する森の違和感から始まった。

メインイベントの開始の合図、「被災者の方から子どもたちに人形のプレゼントがあります。」と松下が呼びかけ、「もらった人は被災者の方と握手をしてください」と森が続けた。このとき、森はこの「ヒサイシャ」という言い方に違和感を持ったと言う。誰の人生も山あり谷ありだ。確かに一気に谷に突き落とされたに違いないが、こうして普段通りにお洒落をし、お金を使い、笑っている人々を「ヒサイシャ」という一括りにまとめていいのだろうか・・・と。

更に、次の出来事で森の違和感が高まった。

会場の中央に5人の高齢者が居る。「この方たちは津波の被災者なんです」というとお客さんは「あら、そう」と真顔になって募金箱はあるのかと尋ねてくる。「ヒサイシャ」を人目に晒して「ヒサイシャ」を「ウリ」にしているような苦い気持ちになったと。

森の違和感に対し松下は、被災者という「使命感」の方を優先する。

イベントが終わり、5人の高齢者は口々に楽しかったこと、そしてこのような場に来なかったらできなかったことだったという感想があったが、その言葉の裏には、地方の一高齢者が、被災がなければこのようなオープンな場に立つことはなかった、という意味があると言う。被災者でなくとも、他者に見られる、待たれる、頼まれることが生きる意味になる。某月某日某時の用事を他者から頼まれれば脳も身体も働かざるをえない。

4月の避難所の時期から関わり続ける松下たちの頼みごとである大学祭参加のために、無料のこたつ獲得を調整して確保し、ある意味義理を果たすべく5人の高齢者たちはやってきたのだ。頼まれ事とは自らが動くバネになる。確かに当人たちを見ると、5人はまさに「ヒサイシャ」という看板を背負って、被災を伝えるという「使命感」を持ち、注目されて舞台に立っていたのだ。

高齢者にとって「使命感」は生き甲斐。そのために「ヒサイシャ」という特別な立場を大いに活用すべきだとの結論が出た。

第 16 回 A 地区仮設住宅訪問記 11 月 7 日(月)

参加者:松下、森、講師 S さん(記録:LLP まち・コミ友田)



今回は前回の袋作りの第 2 回目である。宿題をやってきた人が本日で完成となる予定だ。住民参加者は 7 名。全員が女性である。7 名のうち 5 名が前回の参加者、1 名が見学、1 名は近隣アパートの住人ということだ。被災者であるのかは彼女が寡黙なため不明。

袋作りは大学事務職員の母上 S さんが今日も講師を務めた。元高校教員である S さんは女性たちへの指導が巧みである。参加者は「先生、先生」と質問し、いたずらっ子のように振る舞う人もいる。70 代の女性も「〇〇ちゃん」と呼ばれて、「ハイッ」と大きな声で返事をする。そして皆が笑う。集会所が女学校の教室にタイムスリップしたようだ。

今日は S さんが「房総の手巻き寿司」を手作りし振る舞った。房総の家庭料理で正月や祭りで食される。梅やばたんの花が巻き寿司の小口に現れる美しい料理だ。寿司を愛でる中でも、この寿司を作っていたであろうかつての暮らしが思い起こされたのか、しんと静まる時間が長かった。

手作業をしながら、参加者の一人が自宅の再建ができたと言った。場所は元のところではないという。再びの津波を恐れたということだ。皆が笑う時に一人笑わない女性が「土地、高かったでしょう」と言った。「この歳でこんなに何度も引っ越しするなんて、思わなかったよお」と声が上がる。

今回見学参加の 80 代後半の女性は〇〇さんが参加しているならとやってきた。前からの知人なのかを尋ねると、「避難所で、食べ物運んで来てくれたやさしい人」ということだった。別々の地域から入居し、被災状況が違い、経済力も異なる住民に互いに情報交換できる場をつくる

ことは並大抵ではないだろう。A地区仮設住宅全50戸の内5戸が独居高齢者である。この先1年半で全戸が自宅を再建し、出て行くことは現実的に難しいと思われる。迫ってくる問題を一人で思いつめるのではなく、苦痛を分かち合える被災者同士が話せる場があれば、心の負担が少しは軽減されるのではないか。ここ2回続けて被災と再建の話題が上がった。手作業しながらポロリと溢れる話題であった。

今回はA地区仮設住宅訪問の前にI地区仮設住宅に立ち寄った。次回のチラシ配りと大学祭の写真を届けるためだ。

母親を津波で失った男性が「あー、久しぶり、来たのかあ」と大きな声で近寄ってきた。「植木が全部、風に飛ばされちゃったよ、さびしいよ」と言った。「さびしいよ」を3回言った。彼は聴力に障害がある。「今度、いつ来る、寿司ごちそうするから、待ってるから」と言った。大学祭に参加した90歳の男性は家にいた。くたびれたステテコ姿だ。先日の大学祭ではやはりお洒落をしていたのだ。服を選び、靴を選びと自分を表現した。どれだけの期待感が働いたのであろう。晴れの場があったからこそ、自己表現ができたのではないか。そして松下らの予定に合わせて、畑で丹誠した野菜をすでにA地区仮設住宅まで届けたというのだ。90歳の男性の認知力と行動力に驚いたとともに、外へ向かう企画が彼の暮らしを活性化したことになっていると言える。

被災者は個々に短期的、中期的、長期的に将来を考えないわけにはいかないだろう。その場合、60代、70代、80代、90代では計画に差がある。90歳の男性は来年の大学内の花見に誘われると「生きてるかなあ」と洩らした。いずれにしても高齢者にとって突然の被災から8ヶ月、中期的、長期的将来は見えにくいのではないだろうか。中、長期の未来は近々の暮らしをこなしていくことからしか始まらない。

暮らしに予定を持つこと、自らの暮らしにタクトを振って日々を送ることが生活を成り立たせることそのものではないだろうか。

小さくてもそのためのアクセントに毎月の活動がなり得ることを願う。

外に向かって動く

(14回 15回 16回の総括)

仮設住宅と一口に言っても、被災前から自治が成立している集落がそのまま入居し、復興に向けて同じ目的を持っているところもある。そのようなコミュニティは行政からの支援がない中、災害ユートピア（既出）の時期を経験した。けれども我々が訪問している地区の仮設住宅は若い世代はサラリーマン、高齢者は年金暮らしである。そしてばらばらの地域からの寄せ集まりである。被災世帯は地域のごく一部であり、被災当時にすぐに行政から「施し」がなされた。自治が生まれることはなかった。被災者は地域で圧倒的にマイノリティである。「みんなで復興」という「みんな」が希薄なのだ。コミュニティ形成に必要な要素がない。

都市に広く薄く蔓延するコミュニティの崩壊現象がこの仮設住宅に狭く濃く現れているようだ。どんなエッセンスを落とせばコミュニティとして凝固するのだろうか。「顔と顔を合わせる」「からだとからだに触れ合う」「自然を介して繋がる」これらの機会を「造形」「遊びリテーション」「植栽」を使って提供してきた。今回「ヒサイシャとしての役割」がもう一つのエッセンスになるのではないかと感じた。地域の特徴を確認して、あるいは創造してポテンシャルをあげていく方法はB1グルメにも採用されている。仮設住宅に住まう人達の特徴は被災の当事者ということだ。今回のようにこの体験を外に向かって発信することがコミュニティの凝固剤にならないだろうか。

かつては村々に祭りがあり、教え継がれる物語と技があった。今、村は限界化し、都市には受け継がれる祭りが無い。年長者から若年者への伝授がなくなってしまったことで「高齢者」はただの「加齢者」として扱われる。被災体験は負の資源であるが、今それを語り継ぐことでプラスに転じることはできないだろうか。

私たちは震災後7か月目の東北の国立公園観光地を訪れた。浜では津波から間一髪逃れた人が体験談を観光客に聞かせるツアーが行われていた。災害を熱く語る現地ガイドは、人に伝える「使命感」で能動的に生きている。これから復興に必要なのは多くの観客だと痛感した。

被災から8ヶ月、まだ生活の基盤も安定しない中、被災を振り返るようなことは当事者の気持ちとしてあまりにも辛いことであるかもしれない。17回目の訪問は茶話会を予定している。被災者の口から津波は語られるのだろうか。